

令和6年度第2回役員・リーダー等研修概要

令和6年9月3日（火）12:00～15:00 福知山市市民交流プラザふくちやま 市民交流スペース

「自然災害に備えて今私たちができること」

講師 京都市北部障害者地域生活支援センター「きらリンク」 センター長 土屋健弘 氏

京都市南部障がい者地域生活支援センター「あいりん」 相談支援専門員 出口剛史 氏

●出口講師進行

1 個人ワーク

最初に「いま、皆さんの置かれている環境で自然災害が発生したときに不安なこと、心配なこと」について、たとえば地形、交通事情、地域の取り組み、周囲の社会資源、障がい特性、家族関係などの視点で書き出し、可視化をした。

2 グループワーク

次に個人で洗い出しまとめたことについてグループ間で共有した。

3 全体共有（報告）

グループでの意見、気づき、疑問点、感想、今自分ができることなどについて参加者から報告した。

○参加者1

- ・グループでの意見交換で一番印象に残ったことは、子の障害特性や病気などはそれぞれ違うが子が落ち着かない場所に居れるかということ、事業所や病院も相談に乗って欲しいということ。
- ・事業所や病院とは普段から連携をとって、1年に1回でも話し合うことが大事だと言う意見もあり共感した。

●出口講師

- ・何かあった時、どこに避難するかは大きな課題である。普段からイメージして連携することは難しいと思うが実際、事業所など関係者と話をすることはあるか。

○参加者1

- ・事業所の関係者など話をしたことはないが、家族で家に居なければとりあえず近くの福祉避難所に集合するよう話している。
- ・その避難所は保育園であるが行ったことがないので1回行ってみる必要があると感じた。子が過ごせるには安心感が必要と思った。

●出口講師

- ・いざという時にどこに集合するかは大きなテーマである。福祉避難所ということから集合場所にしているのか。

○参加者1

- ・そうであるがそこで過ごせるかどうか不安なので、主人は農業をしているので最悪はビニールハウスで過ごすこととしている。

●出口講師

- ・能登半島地震でも避難所で過ごせない時はビニールハウスで過ごされたことはニュースで見たが衝撃的だった。

○参加者2

- ・土地が低いので10年程前の大水害で家が浸かり床上浸水した。水害と地震が心配である。
- ・子は重度で医療的ケアも必要なので避難所での避難は難しい。吸引のための電気と医療機器を洗うため水がないと心配である。寝たきりなので避難所は無理である。

- ・その後避難所に避難したことがある。地域に避難所が3か所あるが地元の公民館は畳の部屋で、2階であるがエレベーターがないため階段であがった。若かったので子をおんぶして2階に行き、車いすは市役所の人があげてくれた。3部屋あり奥の部屋を襖で区切り個室にして、おむつ交換や鼻柱から食事した。水は借りられた。一晩で帰れたが階段はきつい。畳であったが座布団を並べて対応した。

●出口講師

- ・避難所に行ってみて気付くこともある。避難所でも過ごしにくいことなどもあると思うのでできるだけ実際に見ておくようにすれば良い。普段から心づもりしておくだけでも良いと思う。
- ・停電の問題は考えておく必要があるが今回の台風で停電対策はしていたのか。

○参加者2

- ・吸引器が使えなくなり肺炎を起こすと困るので充電器に充電はしていた。第1回の研修で万が一の場合は車で充電すれば良いと教えてもらったが今は安価な充電器しかない。
- ・水は停電のこともあるのでペットボトルに水道水を入れて冷凍庫で凍らせている。これぐらいしかしていない。

●出口講師

- ・地震、台風などの自然災害でも停電はあるが、停電自体も身近に起こり得る問題である。

●土屋講師

- ・停電は医療的ケアが必要な方、医療機器が必須な方にとっては自然災害よりも日常的にリスクとなる。
- ・電源の備え付けをしておけるかどうかであるが、いつ停電が復旧するかわからないので、基本的には間に合わせでいくしかない。予備電源があるうちに電気が通っている所まで逃げるのが正解である。
- ・車の電源であるが電気の波形が重要で医療機器は正弦波の電気が必要となる。車のシガーソケットからの電源はインバーター機能付きのケーブルなら可能であるし、PCのサーバー用のバックアップ電源のUPS（無停電電源装置）なら3万円ほどで売っている。なければ仕方がないがこうした正弦波の電源が推奨されている。
- ・逃げた先の大きな病院で一時的にコンセントを貸して欲しいと頼めばまず断られることはないと思われる。そこから主治医と連絡をとって次の対応を考えるのが良策と思っている。

●出口講師

- ・停電への備えは必要で電源のある場所への経路を確認しておくことも必要である。

○参加者3

- ・研修会は初参加である。グループ3人で話し合った。子は年齢も違うが心配している内容は共通していると思った。
- ・家では災害のこととか、避難場所について話し合うことがあまりないので今日話を聞かせてもらい家族で話しておかなければならないと改めて感じた。

●出口講師

- ・共通する心配ごととは特に何か。

○参加者3

- ・台風や大雨の時、TVのニュースでとりあげられるが、過去の衝撃的な映像が放送されており洗脳されたようになり、1週間ほど心配ばかりしていた。避難所で落ち着いて行動できるか不安だと感じた。

●出口講師

- ・先週の台風もいつどうなるのか全くわからないが、10数年前の大きな被害が出た台風と同じ進路をたどっていると強調されていて、それで体調を崩す方もいて家族の心労にもなり、負担にもなったと思う。

○参加者 4

- ・日本海に面した地域に住んでおり家の周囲も海である。1月の能登半島地震は揺れが凄く、隣の市は津波警報だったがこちらは注意報だった。これまで日本海側では津波はないと言われていたが海拔0mに住んでいるので怖い思いをした。
- ・車で避難した方もいて道路は渋滞がおこったと聞いている。
- ・川の無い地域なので水害はあまり考えてこなかったが、今回のことで地域の中でも津波に対する話がはじめた。
- ・子は自閉症、療育手帳Bであり一人では大パニックを起こす。希望すれば載せてもらえるが避難行動要支援者名簿の登載の対象になっていない。名簿に載せるかどうか未だにわからない状態である。

●出口講師

- ・海のイメージはわからないが、年1回の津波の避難訓練とかはこれまでなかったのか。市町が注意喚起しなかったのか。

○参加者 4

- ・皆これまで津波はないと思っていた。市町からの注意喚起とかはこれまでなかった。避難所である墓地に逃げることになっているが津波が来ればそれも危ないと思っている。

●出口講師

- ・海拔0mなので日本海でも津波被害があるかもしれないと思い、地域の町内単位で声が出たのか。

○参加者 4

- ・地域で8月に防災訓練もあった。公園の整備も進んでいる。

●出口講師

- ・今回を契機に町内で防災訓練があった時に子と一緒にいくとか、障害を持った方がたくさん来たとかという話はないか。

○参加者 4

- ・参加は役員が中心となっているのでそういった参加はない。

●出口講師

- ・今回のことで津波被害について考える契機になったので地域の方、障害のある方も一緒に訓練ができればすばらしいと思う。
- ・逃げるとなると東か西しかないのが高い所しかないということか。

○参加者 4

- ・道路が渋滞すれば身動きがとれなくなるので心配している。日本海から少しはいれば山なので大丈夫である。

●出口講師

- ・要支援者名簿に載せるかどうかであるがあまりメリットは感じられないか。

○参加者 4

- ・言いにくいということはある。
- ・声をかけてもらっても子がついて行くかということもある。

●出口講師

- ・家族で何とかなるかなということか。
- ・個別避難計画を作る時は京都市内でも重度が中心となっているがお住まいもそうか。

○参加者 4

- ・そうである。

●土屋講師

- ・要支援者名簿は地域の福祉に関わる人たちに渡し共有されることになっている行政が多く、これが一般的である。
- ・役員に聞いた話では災害時にやらなければならないことを山ほど背負わされており、避難所の開設に手を取られる。名簿に載った要支援者のいる家を一軒一軒回することは無理ですぐに助けにいけるかは現実的には難しい。実際は発災から数日たって気にかけてもらえることになるくらいと思われる。
- ・要支援者名簿は京都市の場合は支援センターに送られてくるが、我々事業者は事業継続計画（BCP）の策定が義務化されている。この計画はどのような災害が起こるかかわからない、職員の誰が出勤できるかわからない中で大まかにしか作れない。通所事業所が開設できて支援が届けられるかどうかによって違ってくる。頑張るけれどもあらかじめ約束できるものではない。通所事業所はその利用者が一番心配であるが市役所からは福祉避難所になってくれといわれる。現実問題として、利用者か地域の必要な方かどっちを優先させるのか。同じような人たちにいろいろな役割が重なって期待されるので実際は計画どおりに美しくはならないと思っている。
- ・個別避難計画は地震、水害の2種類があって、利用者にどうするか、対応する職員はどうなのかなどを書くことになる。私の事業所は賀茂川の東側、職員が住んでいるのは西側で水害が起これば誰も職場にこれない。近所の支援センターで事業所として運営する計画をたてている。

●出口講師

- ・BCPは抽象的にならざるを得ない。いざという時にどのように利用でき、役に立つのか、我々もイメージを持ちにくい状況である。
- ・要支援者名簿はどのように活用されるのかかわからないところもある。

●土屋講師

- ・あらかじめこうするから大丈夫です、とはとても支援者サイドとしては言いにくい。災害が起こって状況をみてから考えることになる。今の段階で安心できることは言えないというのが実状である。

○参加者5

- ・出された意見としては、ディに関して不安がたくさんあるということ、避難場所に移動するにしても家族だけでは困難であることである。
- ・子 26 歳、自閉症、重度で知的障害もあり、強いこだわりがある。暑さ寒さから刺激が入り強度行動障害もある。自分がこうしたいということを強く強く伝えて、成し遂げるといふ強い意志が芽生えてしまった。
- ・物を壊したり、大きな声をだしたりするので、避難場所にいってもそういったことがあると連れていけないと思っており、多分自宅で過ごすことになると思う。
- ・二人暮らし、猫を飼っている。家の中で子が暴れた時、猫は声の調子や雰囲気を見て逃げる。叩きたい時は目が悪いので目だけ守って叩かせているがますます酷くなるので叩かせるのはダメだと思っている。どう対応するかシミュレーションしてしのぐ方法を自分の考えられる範囲で対応してきているが、本人のためになっているのか心配である。こういうことを詳しく相談できるところが身近にあるとありがたい。
- ・心配ごととは月 1 回療育センターの医師と相談し、25 歳になってから薬の投与も始めた。精神を落ち着かせるようにしている。私としては本人が嫌なことを一生懸命に伝えてくることに対して薬でセーブさせても問題は解決しないのではないかと考え、薬に対して使うべきかどうか悩みがあった。本人が何に悩んでいるのかに向かい合うということである。
- ・薬を使うことを選んだのは、家族以外の方にご迷惑をかけることを思えば使わなければいけないと思った。いつまでも家にいるのではなく、たくさんの支援を受けて生きていくので薬をいれて生活している。
- ・子が家の中でパニックになった時は叩かれながら「何でやろ」と考えている。私が逃げれば良いと気づき逃げると、しばらくすれば落ち着いて「お母さん、お母さん」と呼びかけてくる。やはり基本は「怖い、悲しい」という気持ちで向かってくると思う。落ち着いて次の行動に行く。
- ・雷で停電になった時に通電するまで離れたスーパーで 2 時間ぐらい時間をつぶし、通電してから自宅に戻った。蓄電のことも聞いたが解決には時間とお金もかかるので、折り合いをつ

けながら探していくしかないと思っている。

●出口講師

- ・自然災害が起こった時に避難所に行くか、自宅にいるかの選択は大きなポイントとなる。最初から自宅に止まると決めておられる場合、注意すべき点として避難者名簿に関することがある。

●土屋講師

- ・一般の避難所にとりあえず行くかどうかをあらかじめ決めておいた方が良い。知らない人がたくさんいる所が苦手なお子さん、心配な行動が出てしまう方などは一般の避難所は行きにくいと思うので可能な限り自宅避難になるのか、避難所の敷地内で車中避難するのかは先に決めておいた方が良い。避難所に行ければ良いが行けない人は、地域の避難所には名簿ができるので名簿に名前を書いて、「自宅避難中、障害の子あり」や「敷地内で車中避難中」のようにどこにいるのかメモ書きしておく。すぐにではないが数日たつと行政は名簿を基に動き始めるので居場所などがわかることになる。それぐらいは決めておくことを勧めている。
- ・「一般避難所に連れて行けない」と言われる親御さんは自閉症のお子さんをお持ちの親御さんが多い。医療的ケア児者の場合は避難所にすら行けない。とにかく避難所の名簿に名前などの情報を書いておくだけでも意味がある。

●出口講師

- ・どこにいるのかを分かるようにしておくことは大事である。
- ・先程のスーパーの話であるが、スーパーが避難先になることは普段から考えていたのか。

○参加者 5

- ・とっさ的にその時に決めた。関電のHPでどこの地域が通電してるか調べて電話で聞いてから行った。子には普段通り買い物に行こうと言って連れ出した。

●出口講師

- ・「避難しよう」というより普段からの行動と同じように買い物に行こうと言って避難できたということである。
- ・大型のスーパーなどは地域で活用できる資源になり得ることがわかった。

○参加者 6

- ・住んでいる地形の状況などの話をした。
障害の特性では自閉症を持っており、非日常的なことがあると大変とのことであった。子を落ち着かせるためのおもちゃなどを持ちだして行く必要があるなど、話があった。
- ・これまでの発表をきいて「そうだな」と改めて自分の考えがまとめられた所があった。
本人一人の時にどうすれば良いか、要支援者名簿の記載をどうするかを考えた。
発災までもいかないが停電で電気がないとパニックになったが普段からシミュレーションしていくことが大事と思った。皆さんの発表は勉強になった。

●出口講師

- ・先程のグループ共有の時に亀岡は停電がよく起きると聞いたが停電のリスクは身近にある。我々のような相談支援専門員が障害のある方といざという時にどう行動するか、どんな支援が必要になるか考えるが、先程の方の発表では結局日常の関りの延長線上にいざという時があると感じた。いざという時にどうしたら良いかわからないことがあると思うが普段の関りを積み上げていくことが大事だと思った。

○参加者 7

- ・3人で地域性など住んでいる所の状況を話した。内容は、地域で障害を持った方の避難訓練を試しとして計画されていたがコロナ感染症で延期になりできなかった。
- ・家の中で畳一畳ぐらいのスペースで家具などが倒れてもケガをしない場所を作っておくことが必要である。
- ・避難所へ行けば何とかなるかもしれないが、そこに行くまでは自分の子は自分で何とかしなければならぬし、地域の人たちも一杯で余裕があれば助けてもらえるかもしれないが、一人の時でも「ここが避難所やで」と日常的に散歩とかで教えておかなければならぬ、な

どの話を聞かせてもらった。

- ・私ごとであるが家族が多く、本人以外にも孫がいる。留守番中に発災すれば私は障害のある子連れだせない。いざという時に判断できないと思った。
- ・住んでいる所は海沿いで1月の能登半島地震では波が高かった。高台に避難する人もいたが我が家は警報で避難することになっていたので自宅待機した。
- ・道路が一車線のため車で混雑していたが多くの人が避難したと聞いた。
- ・高浜原発がありここは30キロ圏内なので逃げることも大事であるがヨウ素とか原発に対する知識もなく、行政で避難訓練もしたが緊迫もしておらず、今は原発のことが一番気になる。知識をつける必要があると思った。

●出口講師

- ・目の前が海で羨ましいが一方でリスクもあるということを知った。原発30キロ圏内で訓練があったということであるがいざという時に役にたつかどうかはある。
- ・家族が多い場合、発災時にどこに集合するとかは普段から話し合う必要があると思うが、一杯シチュエーションがあるのでなかなか決めにくいこともある。
- ・地域の避難訓練に家族で行った方はいるか。

<2名挙手>

- ・私の事業所のある伏見区で年1回小学校区で避難訓練をしているが全員は難しいができればその学区に住んでいる方は避難所に行くようにしようと話をしている。移動支援を使い避難経路を1回行ってみるとか、その建物に入るとか、参加しにくい方もいるが避難訓練を活用することは大事である。

<休憩>

●出口講師

1 個人ワーク

- ・先程の全体共有を受けての感想や今からできそうなこと、取り組んでいこうとということを考えて。

2 全体共有（報告）

○参加者8

- ・今日はいろんな話を聞かせてもらい、とりあえず避難場所などについて子と話をしたい。地域の避難訓練に参加したことがないので機会があれば参加したいと思っている。子連れで行くのはどうかと思っていたが連れて参加したい。日ごろから食糧や水を備蓄しているがもう一度見直してしっかりと準備したい。

●出口講師

- ・地域の避難訓練に行ってみようと思った理由は何か。

○参加者8

- ・避難所自体は近くの小学校だが参加したことがない。長いこと行っていないので、日頃は小学校に行くに変な人と思われて110番されても困るので、訓練の時に連れて行けばよいと思った。

●出口講師

- ・行ったこともない人もいると思うがせめて避難所の場所や経路などの確認は貴重な機会だと思う。

○参加者9

- ・30年前に現在の家に引っ越してきた。家族は夫婦と娘二人であるがよそからの人ばかりが集まってできた町である。今は近所も高齢者ばかりになった。引っ越してきた場所なので家族のこと、娘のことを知ってもらうために地域の行事に参加するように努力したがやはり偏見があった。運動会でも負けた時は極端に言えば娘の責任にされた。こうしたこともあり徐々

に億劫になり子をおいて夫婦で参加するようになった。ある方から「もう一人の子を何故連れてこないのか」と聞かれ、説明すると「何故そんなことを思うのか」と言われた。やはり家族しかわからないことがあるが「どんどん連れてくれば良い」と言われた。

- ・地域の人たちにわかってもらえるようにして、組内だけだが知ってもらえた。皆から声をかけてもらっている。地域の行事も少なくなってきたが、皆にわかってもらい声をかけてもらえるよう頑張っている。
- ・市街地からは一本の道しかないのが災害で崩れれば陸の孤島になる。大阪にもつながっているが地域性の違いもある。車がなければ生活できない所である。

●出口講師

- ・長く住んでいるメリットもあるが一方で昔と少し違うということもある。今はどうかということを考えてくことが大事である。今回7名が参加していただいております、親の会の課題ともリンクしてくる所もあると思う。

○参加者10

- ・今年から役員になり前回研修会に初めて参加した。病院に駆け込むのが一番の電源確保であり、水源確保と聞いて感心した。
- ・もう一つは今日スーパーに避難した話を聞いたが凄いと思った。災害時にスーパーが困っている人たちの心のケアの場所にも利用できるよう福祉に参加してもらえるとありがたい。行政に伝えて行政から表彰してもらうとか市民に優しいスーパー作りをしてもらえばありがたい。親の会では市に対し要望し懇談会を行うが親の会のこと、障害者の立場を行政は知らない。本人や親の苦しさを知ってもらうことも親の会の大きな役割だと思っている。個人的に市に言っても聞いて貰えないが団体なので市も少しは耳を傾けてもらえる。
- ・こうしたことを通して災害時の不安感、親がどういう時に孤立感を感じるかなどに目を向けてもらえる行政になってもらえたらありがたい。親は災害時には頑張るがそのことを共感、共有してもらえない場所がない。親の会、事業所、相談員が声をかけあい共感を持てれば大きな力になる。お互いに様々な連携ができるシステム作りができれば良い。
- ・市内ならどこにどんな施設があって、どういう人たちがいて、どこなら助けてもらえるのかなどがわかる福祉マップが欲しい。電源、水が使えるなどの「お助けマップ」である。親としては助かる。

●出口講師

- ・正に研修の目的である「それぞれの親の会に持ち帰って何ができるかを考える」ことと思う。今の話どおりに実現できれば地域の人にとっても良いし講師としてもありがたい。

○参加者11

- ・家族でできるのは一番には家の中で安全な場所を作っておいて家族で確認し合うことだと思った。
- ・地域の避難場所を日頃から本人に伝える。近くを通れば行ってみるとか。地域の訓練についてもこれまで本人が嫌がるので親だけで参加していたが少しずつでも一緒に参加していければ良いと思った。
- ・子が小さい頃は地域の行事や祭りに連れて行きわかって貰えるようにしていたが、年齢を重ねるごとにきたがらないので身近な隣近所の方にどういう子かいるのかを常にわかってもらえるよう伝えていかなければならないと改めて思った。
- ・親の会としても一人ではできないことを避難所のことや困っていることを市に伝えて少しずつ変えていってもらえるように動いていけると思った。
- ・住んでいる地域は駅の南側で水害の心配はない所で安心感があり組織的にやろうということが見えない。
- ・今は家族の構成も変わってきており、障害者だけでなく高齢者なども一緒に地域で連携してスムーズにできないかとか、要支援者名簿に登録はしてるがこれがどう活用されるのか不安もある。書類だけでなく実践できるように地域の人にも伝えたり、訴えたりして安心できるようにできれば良いと思った。

●出口講師

- ・地元の方にそのように感想を言って貰えてうれしい。別に障害のある方、家族だけが困る問題ではないので地域の人たち皆で一緒にできれば良いと思った。

○参加者 1 2

- ・ビニールハウスに逃げるといった話があったが、家も 50m のものが 2 棟あるので家族 6 名には地震の揺れが収まればどこにいてもビニールハウスに逃げよう伝えている。多分大丈夫だと思うがいざという時にどうなるかと心配である。
- ・先程の自分の子の状態のこと知ってもらうことが大事ということであるが本当にそのとおりである。子は 41 歳であるが作業所で地域の 20 軒ほどを一人で回っている。一応地域の中では子のことは知ってもらっているのでこの点は安心している。何かあれば声をかけてもらえる気持ちとしては安心感はある。
- ・災害時には隣組で声を掛け合ったり、高齢者もたくさんいるので何かの時には近くの公民館に皆で声を掛け合っていくとか、家の中でも蓄電の準備や避難グッズの準備とか、今は当たり前のようにしておく必要があると思った。少しずつ準備を始めている。
- ・作業所に行っているが家族に一番に連絡してもらえるよう、親と施設の話し合いも大事になってくるだろうと思った。
- ・とりえず一番大事なのは家族間で災害時にはどうするかの話し合いをきちっとしておくことだと思った。

●出口講師

- ・本人と関わりのある福祉の関係者が何かの機会話し合うことは大事である。

<まとめ>

●土屋講師

- ・いろんなご意見が出たが正解はない。だからこそこのように考えてこのようにやってみようと積み上げていくことが大事だと思う。何かうまくいってないと「行政は何をやっているのか」という気持ちになる。それでも行政は行政で無理難題を何とかするために結構頑張っている。
- ・例えば、地域の避難所はどこに開設されるかまでは決まっている。どういうことかと言うと地域で避難所を運営してくれる人たちに合意をとって、説得して了解をとってきた段階である。その避難所の運営について、「我が家の子はどうやねん」といったところでまだまだこれからの話である。とりえず避難所が開設されますよというところまで行政は進めてきた。まだ途中なので我々はそのに行けば安心だという状況ではないことから、今できることは何かを考える段階である。
- ・先程、避難所での避難訓練に行ってみようという話もあったが、それが地域の避難所の中で障害を持った子を受け入れていくための何かしらの礎になって、来年から OK になることはないと思うが、ずっと行き続けていたら運営する人たちもいろいろと考え始めて良い方法がいつか見つかるかもしれない。そういう意味では地域の避難訓練に参加するのはとてもとても大事な一歩だと思った。
- ・このような研修、話し合いをお住まいの市町村でやってみることもすごく大事である。親の会のメンバー、地域の支援センターの人たち、市町村の担当者が参加して今日と同じことをやれば自分の地域ごととしてもっともっとリアリティのある話ができると思った。
- ・個別避難計画を一定の人たちに対して作りましょうと全国的に始まっている。この計画は意味があるかないかという書類を書くこと自体はあまり意味がない。しかし「私の話」をするのでリアリティのあることを決めて書くこととしている。
- ・事例であるが、車椅子の方で川沿いに住んでいて、発災時に避難する時に避難所である小学校には行かないと決めている。水害にあいにくい場所に主治医がいる病院があるのでそこに避難することを決めた。24 時間のヘルパーと一緒に早めに逃げることも書いている。これ自体はこの人にとって意味のあるものになる。
- ・次の事例は電源であるがとにかく電源のある所に逃げる。地震の断層の上で土砂災害の危険がある所に住んでいる全身性障害で階段昇降機が必要な方である。この方は PC 電源を利用して逃げる。逃げる方向は地震の場所によって大丈夫な方向に逃げる。大きな病院で電源を借りてそこで主治医と連絡が取れる状態になれば次にどうするか相談ができる。どうするか決めておくことが大事である。
- ・発災時、家族と一緒にいる時は決めているが、今日の話で例えば平日・日中、施設にいる時はどうするか、これは施設と話ができる。親がいなくても自宅に帰すとか。連絡がつけば帰すが見つからない場合はつくまでは施設にお願いするとか。お出かけ中に発災した場合、親が本人の居場所がわからない場合、スマホを失くしたらどこにあるか調べられる機能があるが、

本人がスマホを持っていたらそれで調べたら本人がどの辺りにいるかわかる。スマホを持っていない場合は、親御さんが 아이폰なら例えば「アップルタグ」という商品があるが、そのようなスマホや荷物を失くせば調べられるというテクノロジーが一般の商品としてあるのでそれをうまく使えばご本人がいる場所を探せるかもしれない。こんなことを少し考えてみれば心配ごとの一つを減らせる。そんなことを考えながら知恵をだしあって今できることを積み上げていくことが大事だと思う。

●出口講師

- ・今日の研修ですべて解決したということではない。これをきっかけにして、家族として、親の会として、地域として、何か一つでも進めば良いと思っている。
- ・皆さんからたくさんのお話しをしていただきこの研修が成り立ちました。ありがとうございました。

了